

法然の名号観

神戸和麿

一 名号の開示する仏道は、

然則弥陀如来、法蔵比丘之昔、被_レ催_二平等慈悲、普為_レ撰_二於一切不_レ以_二造像・起塔等諸行_一、為_レ往生本願、唯以_二称名念佛一行_一為_二其本願_一也。(本願章)

と表白される唯称名念佛の一行にある。
しかし、その唯称名念佛の一行の選びは、仏道の行のなかの六波羅蜜、あるいは止観の道に対して、念佛の一行もあるということではない。その「唯」、「ただ念佛して」の教言の意味する廃立・選択本願の行信(自証)は、仏道における成仏の可能性(信仰の可能性)がどこで成立するかという根源的規定の覚知をめぐっての問題である。

そのことは、成仏の可能性を人間的実存の営みから思考するあり方か、如来の言(名号)の聞信によって成就する往生道か、その法の覚知(機)の秩序が選択・廃立の教相によって決判されてくるのである。

『選択集』の冒頭には、

『安楽集』上云。問曰。一切衆生皆有_二仏性_一、遠劫以来_レ成_二値_二多仏_一。何因_レ至今、仍自輪_レ廻生死_一不_レ出_二火宅_一。

と、はじめに仏道の課題が何であるかが確かめられている。つまり、釈尊の自内証である一切衆生悉有仏性という原理的可能性が、この世の歴史内部、生死に輪廻し火宅を出でない現実にとどのよう

に事実的可能性としての発起となるかという課題である。

そのことは、法身常住一悉有仏性(『涅槃經』)、あるいは真如一淨体(『玄義分』)、また、真如一種子(『二乗要決』第七仏性差別)という関係において、有漏(煩惱)を超えて無漏種子(仏性)がどのようにに聞薫習の仏道修行によって顕現するかということにほかならない。善導は「玄義分」に、

真如之体量、量性不_レ出_二蠶々之心_一。法性無辺、辺_レ則元来不_レ動。無盡法界凡聖齊円、両垢如_レ如_レ普該_二於含識_一。洄沙功德_レ寂用湛然。但以_二垢障覆深_一淨体無_レ由_二頭照_一。

と、真如一淨体(仏性)の関係による菩提心、仏道修行の歩みのなかで、「以_二垢障覆深_一淨体無_レ由_二頭照_一」と表白している。そのことは、また『法事讃』においては「不知_二身中有_二如来仏性_一」とも示している。

かように、仏道の課題は真如一淨体、真如一種子の関係構造における菩提心、成仏の可能性がどこで事実的成立するかという問にあるといえる。

その点において、法然の求道を尋ねていくとき、信仰の可能性ははっきりとした「自力断惑」、「他力断惑」(『浄土宗大意』)の二つの形態によって明示されている。

自力断惑とは、「断惑証理」の自力成仏の可能性であり、他力断惑とは、「内証外用」の名号法による他力往生の可能性である。ここで自力、他力の区別は、単なる分類概念ではなく、信仰の可能性を推求していく歩みのなかでの廃立(回心)、実践的了得にある点が留意される。

二 法然の自力断惑、「断惑証理」の仏道実践は、回心を表白する『和語灯録』、また『無量寿経釈』に自力の断惑証理を通し

ての「横截」、他力断惑の道が示されている。そこには、仏陀の正覚である真如を求め、未覚から覚への方位に漸次に進んでいく断惑証理の仏道志向、あり方の転換が明示されている。

その仏道の転換は、長い苦悶の求道のなかで、善導の『観経疏』により、如来の言(名号)を聞信する一道の地歩にある。そこで「唯偏選取念仏一行」の所以について、

所以者何。名号者^レ是万徳之所帰也。然則弥陀一仏所有四智三身十力四無畏等一切内証功德相好・光明・説法・利生等一切外用功德、皆悉撰^レ在阿弥陀仏名号之中。故名号功德、最爲勝也。(本願章)

と、「内証外用」の阿弥陀仏の名号法の覚知にあることが明らかにされている。

そこには成仏の名号、阿弥陀如来の内証外用の真理表現が、どのように衆生の正受、往生道となるかが鍵としてある。そのことは、自利各別の菩提心に立つか、名号法の利他一心、如来の願心(法蔵因位)に立つか、という仏道の覚知、自覚自証の開示が何に基づくかという一点にあるといえる。

それ故、その道は、決してあれかこれかの二つの分類のなかでその一方を選ぶという営みではなく、仏道修行の歩みにおいて、その歩みの限界が自らの発心、菩提心そのものを問う転回点といえる。いい換えれば、人間を出発点とした自力の菩提心そのものが、菩提心を内観する歩みのなかで、人間心を破る他力の菩提心に覚知する出来事にほかならない。一体、人間存在に真如・法身・実相・仏性を覚知する認識能力、資質があるのか、そのことが底の底まで法の鏡によって省察されなければならない。

そのことは、「三心章」に、

若有^レ衆生、願生^レ彼国^一者、発^レ三種心、即便往生。何等爲^レ三。一者至誠心、二者深心、三者廻向発願心。具^レ三心^一者、必生^レ彼国。(観経)

と、仏(正覚)を求めていく菩提心が、逆に仏によって確かめられる「仏自問自徴」、「如来還自答前三心教」(至誠心釈)という内観にある。一者、二者、三者と仏言によって「必生彼国」の菩提心自体が菩提心を見究め尽すのである。

しかるに、一者、二者、三者の確かめは、決して三つの事柄としての願生心、菩提心を分析するのではなく、菩提心が菩提心を内観するなか機・法の分限、二種深信を明確にしてくるといえる。

その至誠の歩みは、

不^レ得^レ外現^レ賢善精進之相、内懷^レ虚仮^一。

という、内外の一致、翻転を要請する真実への道である。

いま、法然は「三心章」の私釈に、(a)線については、

外者対^レ内之辞也、謂外相与^レ内心不^レ調之意。

と示し、

外^一智・賢・善・精進

内^一愚・愚・惡・懈怠

という四類の対比をなしつつ、「若夫翻^レ外善^一内者、祇応^レ備^レ出要^一と、「外」を翻えし「内」に蓄える仏道実践を明らかにしている。また、(b)線についても、同じように、

内者対^レ外之辞也。謂内心与^レ外相不^レ調之意。

と示し、

内^一虚・仮

外^一真・実

という二類の対比をなしつつ、「若夫翻_レ内播_レ外者、亦可_レ足_二出要_一と、「内」を翻えし「外」に播ざば出離の要道に役立つ転換が明かされている。

ここに、仏陀の智慧、正覚の世界をどこまでも「外」なるものとして志向し、その「外」を翻えし「内」に蓄え、人間の虚仮なる「内」を翻えし「外」に播すという、その至誠の仏道実践は、どこまでも仏陀の智慧、正覚を「外」なるものとして理想的に志向していく、定散自力の至誠心による信仰的可能性といえる。つまり、「断惑（内）証理（外）」の実践とは、宗教心自体が試みんとする絶対矛盾の統合である。その絶対矛盾は、人間の思考、また、いかなる懸命な努力によっても統合されない、否、統合する必要のない事実的不可能性を南無（機）と阿弥陀仏（法）の分岐点、分限にて知らしめてくる。

長く人間の自力の可能性によって結合点を見出そうとした自負の夢、あたかも空高く飛翔した羽毛が果てしない旅路のすえ、やがて大地に舞い戻るように、自力至誠の歩み、断惑証理の試みは、「必不可也」（「至誠心積」という限界点に直面してこそ、人間本来の座に安んずるといえる。

そこに、私たちを全く逆に、「内証外用」の阿弥陀如来の名号法にて撰取して捨てずと覚知を促しめる一道、「阿弥陀仏因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も、三業の所修みな真実心中に作したまいしに由てなり」（前同）という、名号を体とする法蔵の因源、自覚的立脚地を信知する。その自覚内景こそ、

まず「罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた出離の縁あることなしと信ぜよ」といへる、これすなわち断善の闡提のごときものなり。（三部経大意）

と言われる限界点の自覚にほかならない。「断善の闡提」とは、『選択集』の『法事讃』引用によれば、「生盲闡提」である。

かかる省察、内観は、人間において真如・法身・実相・仏性を覚知する認識能力、資質のない「生盲闡提」、いわゆる「無明淵源之病」、「五逆、重病淵源」（『選択集』）の自身である。

真如・法身・実相・仏性の覚知、それは人間の認識能力、資質によるのでなく、逆に人間自体（生盲闡提）が、真如・法身・実相・仏性、つまり、如来内存在への謗法、無明に覚知を促す、絶対に順序、秩序が混同されてはならない、名号法に仏道の自覚的立脚地の開眼を得るのである。

三 しかるに、仏道の金字塔である名号六字積（三行章）、法然の実践的体解もって表現された「不回向行」は、

言_二南無_一者、即是帰命、亦是発願回向之義。言_二阿弥陀仏_一者、即是其行。以_二斯義_一故、必得_二往生_一。（女義分）

という、明確な名号を体とする利他一心の仏道の自覚的立脚地の見定めにある。

一体、私たちにおける信仰の可能性とは何であるのか。その眼目は、「発願回向之義」を人間に属しての覚知とするか、如来に属しての覚知とするか。そこに、法然の名号観が指教する仏道、念仏往生道の基本的了解があると推求する。